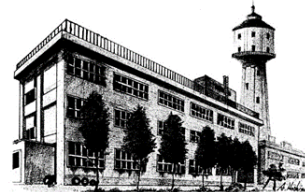


新潟県立長岡聾学校 学校だより

令和8年3月6日発行

はくちょう

〒940-0093 長岡市水道町2-1-13 TEL 0258-32-1007



輝く未来は、日々の積み重ねの上に

教頭 田邊 豊

3月6日には、高等部産業技術科が1名、普通科が4名、計5名が卒業します。また、3月19日には、幼稚部4名が修了し、小学部4名、中学部3名の計7名が卒業します。修了・卒業する児童生徒と保護者の皆様に心からお祝い申し上げるとともに、子どもたちを支えてくださった多くの方々へ厚くお礼申し上げます。また、他の学年の子どもたちも進級・進学のため、1年間の総まとめに取り組んでおります。大切な残りの日々、変わらぬご支援をよろしくお願いいたします。

今年度を振り返ると、スポーツを通じて「聴覚障害」への眼差しが大きく変わった、記憶に残る1年であったといえるのではないのでしょうか。11月に開催された東京2025デフリンピックは、日本初の開催ということもあり、多くのメディアで取り上げられました。これにより、これまで必ずしも高いとは言えなかったデフスポーツへの認知度が広がり、聴覚障害について社会全体で深く知る貴重な機会となりました。とりわけ、バドミントンをはじめとする新潟県出身選手の躍動する姿には、私たちが胸が熱くなりました。当校の子どもたちも、画面越しに声援を送りながら、将来の自分を重ね合わせたことと思います。

この大会は、競技の感動だけでなく、コミュニケーション手段としての手話の普及にも大きく貢献しました。聴覚障害における最大の壁は、コミュニケーションの障壁です。手話が誰にとっても身近なものとなることで、大会ビジョンである「誰もが個性を活かし力を発揮できる共生社会」の実現は、より確かなものへと近づきました。

当校においても卓球部の活動がNHKの番組で紹介されたほか、卓球や陸上で全国大会に出場するなど、目覚ましい活躍が見られました。

しかし、輝きは特別な舞台にだけあるものではありません。大きな成績には繋がらなくとも、教室や部活動で日々黙々と努力を積み重ねる姿こそが、当校の宝物です。

デフリンピックが示した「共生社会」という未来は、こうした子どもたち一人ひとりの「日々の積み重ね」の先にあります。選手の活躍の裏には、日々の絶え間ない努力の積み重ねがあります。手話が広く知られたのも、手話を学ぶ努力を続け、手話を使い続けてきた方々がいたからです。そう考えれば、日々この学び舎で自らを鍛え、自らの手で未来を切り拓こうとする児童生徒たちは、まさにビジョンを体現する、かけがえのない存在です。きっと、かれらは自らの手で、輝かしい未来をつかみ取ってくれると信じています。

最後になりますが、今年度賜りました多大なるご協力に深く感謝申し上げます。令和8年度も、子どもたちがさらに個性を輝かせ、活躍できる場を広げていけるよう努めてまいります。引き続き、皆様のご理解とご支援をよろしくお願いいたします。

「令和7年度の教育活動の振り返りと次年度の課題」

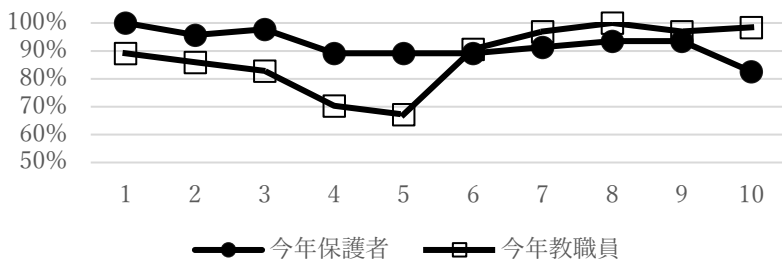
教頭 田邊 豊

12月に学校評価アンケートを保護者と教職員に行い、以下のとおりの結果となりました。

【アンケート項目】 回答方法 A思う Bやや思う Cあまり思わない D思わない Eよく分からない

- ①子どもは、授業で学んだことが身に付いていると思いますか。
- ②子どもは、自分で考えたり、自分で決めたりする態度が身に付いていると思いますか。
- ③子どもは、集団や社会のルールを守り、他人を思いやる気持ちが身に付いていると思いますか。
- ④子どもは、健康的な生活習慣や、運動・スポーツに親しむ態度が身に付いていると思いますか。
- ⑤子どもは、語彙力や言語力、状況に応じたコミュニケーション力が身に付いていると思いますか。
- ⑥学校は、地域や他校と交流する活動に適切に取り組んでいると思いますか。
- ⑦学校は、子どもたちが分かりやすい、工夫した授業が行われていると思いますか。
- ⑧学校は、一人一人の子どもを大切に、誠意をもって教育活動を行っていると思いますか。
- ⑨学校は、子どもの支援のため保護者・関係機関と連携していると思いますか。
- ⑩学校は、障害の理解や様々な研究・研修に取り組み、専門性の向上に努めていると思いますか。

今年度のプラス評価（AとBの割合）



保護者評価では、全ての項目でプラスの評価が80%以上でした。さらに、①から⑨につきましては、89%以上という極めて高い評価をいただきました。特に、授業で学んだことの定着に(①)については、100%に達しており、日々の学習成果を家庭でも実感されていることがうかがえます。

昨年度と比較すると、大きく以下の3点に言及できます。

・学習面と語彙力の成長(⑤:5.4ポイント上昇)。保護者評価の自由記述でも、「去年よりもはるかに語彙力が成長した。」「自分で伝えたいという気持ちが出てきた。」といった前向きな声が届いています。これを励みに、これからもコミュニケーション能力の伸長に尽力していきます。

・運動機会の不足(④:9.7ポイント低下)。教職員評価において、「運動系の部活が限られている。」「昼休みが短く、意図的に設定しないと運動量の確保が難しい。」といった意見が聞かれました。部活動の選択肢の検討や休憩時間の活用方法など、時間的・環境的な制約を改善し、児童生徒がいきいきと身体を動かせる環境を構築します。

・専門性への期待と課題(⑩:8.1ポイント低下)。自由記述では、「教員間で手話のレベルに差がある。」「研究内容が伝わってこない。」といったご指摘をいただきました。研修を重ね、組織としての指導体制の均一化を図るとともに、研修や研究の可視化に努め、保護者の皆様の信頼へとつなげていきます。

2月17日(火)には、学校評価委員会を行い、委員の皆様から、学習活動を参観していただくとともに、学校評価の説明をし、ご助言をいただきました。参観から、児童生徒が集中して真剣に学習に取り組んでいる点について評価いただきました。また、聾学校における専門性とは何か、校内で明らかにしながら保護者にも発信し共通理解を図る必要性があると指導をいただきました。他にも、校内掲示の書から文字を書くことの大切さ、PCを使った学習から多様なアプリを使う経験の重要性、職員が課題と感じている運動量の確保などについても意見が交わされました。

今年度のきこえ相談について

支援部

支援部では、通年「子どものきこえ相談室」を設置しています。新生児聴覚スクリーニング検査で難聴の疑いのある乳幼児や保護者等をはじめ、きこえにくさのある小学生から高校生、その関係者への支援を行っています。



特設の活動として、今年度も夏のきこえ相談会を実施し、のべ22件の相談がありました。各教育委員会への案内に加え、養護教諭や難聴・言語通級の先生方へも別途案内したことで、広く周知されたように思えます。次年度以降も理解啓発に努めていきます。

また高校生からの相談もありました。難聴のある高校生への支援は十分とは言えない現状があります。授業での補聴システムの利用や、受験時の配慮事項等についての情報提供等を行っていきたくと思います。

今年度の傾向として、小中学生の新規相談が多いこと、昨年に引き続き「LiD / APD (聴覚情報処理障害/聞き取り困難)」に関わる問い合わせや相談が増えたことが挙げられます。

今後も難聴児やその保護者等への支援と、学校・関係機関への理解啓発に努め、連携を図りながらきこえにくさにかかわるサポートを行いたくと思います。

今年度を振り返って

進路指導部

春の学部 PTA では、一部の学部において以下のことを進路指導部からお話しさせていただきました。



「子どもたちが将来、社会の中でたくましく自分らしく生きていくためには、国語、数学などの偏差値ではかれる「認知能力」だけでは不十分で、意欲、協調性、粘り強さ、忍耐力、計画性、自制心、コミュニケーション能力など、測定できない能力全般を定義した「非認知能力」が求められる。」

企業向けのアンケートでも、急速に変化する社会に適応できる人材として、「主体性」「創造性」「チームワーク」などの非認知能力を重要視していることが明らかになっています。また、非認知能力が高い人は、「何かをやり抜く粘り強さ」「自分の感情をコントロールする力」「計画を立てて実行する力」などがあることで、人との良好な関係を築くことができたり、状況の変化にも対応できたりします。目には見えづらい非認知能力が、実は人生を豊かにし、幸せな人生を切り拓いていく力(土台)であり、「生きる力」になるのだと気付かされます。

進路指導部ではキャリア教育年間計画に基づいて、一人一人の児童生徒がよりよく主体的に進路選択できるようにするための支援を行っております。その際、非認知能力を伸ばすこともねらいとして活動を組み立てています。

今年も高等部普通科、高等部産業技術科重複学級では、校内実習や現場実習を行いました。日々の職業の授業の集大成でもある実習を経て、生徒は粘り強さや挨拶などのマナー、時間を守ることなど、将来社会の中で生きる力を少しずつ身につけています。中学部は長岡郵便局を見学し、働くことや働くために大切な力について学習しました。高等部産業技術科では、聾の先輩から話を聞く会を親子参加型で行いました。「聾者が社会で生きていくためには」というテーマで、将来について考える機会をもつことができました。

一生を掛けて伸ばしていけるという非認知能力は、まさに進路指導が目指す生きる力そのものです。来年度も様々な活動を通じて児童生徒の伸びる力を育てていきたいです。

学部	卒業生数	進学先志望先・進路先 ()内は人数
中学部	3	県内高等学校志望(2)、高等専門学校(1)
高等部	産業技術科	1 就職(1)
	普通科	4 就職(2)福祉サービス事業所(2)
	産業科(専攻科)	0

寄宿舎

4月に新しい仲間を迎えてスタートした寄宿舎生活も残りわずかとなりました。現在は、1年を締めくくっておわかれ会の準備を進めています。

寄宿舎は小学部から高等部までの幅広い年齢層が共に過ごす中で、低学年の子どもたちが先輩の姿をお手本に生活する姿や高学年の舎生が後輩にそっと手を差し伸べる温かい雰囲気があちこちで見られました。寄宿舎ならではの温かい光景に今年度もたくさん出会えたことを大変嬉しく思っています。

また、例年の四季折々の行事に加え、今年度は子どもたちが自ら企画・運営した行事もたくさんありました。毎年実施している舎生会アンケートでは、楽しかったこととして「お楽しみ会」を挙げる舎生が多く見られました。自分たちで意見を出し合い、形にする喜びや、仲間と協力して運営できたという達成感を得ることができました。

次の生活するステージでも寄宿舎で培った経験を活かし、たくさんの「できた」「うれしい」を感じてほしいと願っています。

